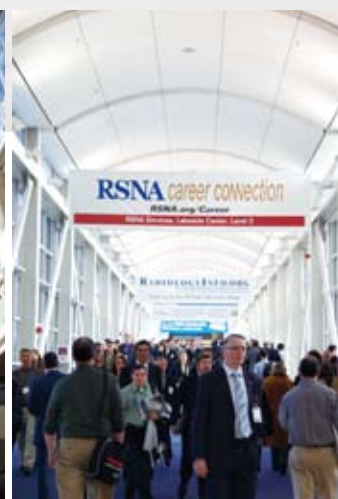


RSNA 2008

Personal Learning in the Global Community

2008年11月30日(日)～12月5日(金)の6日間、第94回北米放射線学会(RSNA 2008)が米国・シカゴのマコーミックプレイスで開催された。本大会のテーマは、グローバル化する放射線医学における教育のあり方を考える“Personal Learning in the Global Community”。本特集では、日本医学放射線学会との合同企画“Japan Presents”が行われたことも注目された6日間を、エキスパートの先生方による領域別ベストレポートで解説する。なお、機器展示のレポートは、1月号別冊付録『RSNA 2008 ハイライト』、インナビネットの「RSNA 2008 スペシャル」をご参照ください。



米国だけでなく、世界にとっても歴史的な1日となった2008年の米国大統領選挙の11月4日から26日後の11月30日、その当選を受けて、オバマ新大統領(2009年1月20日の就任式で第44代米国大統領となる)が12万人の観衆を前に演説を行ったシカゴのグランドパークから南へ約5kmに位置するマコーミックプレイスにおいて、第94回北米放射線学会(Radiological Society of North America: RSNA)は開幕した。

2008年のシカゴは雪の訪れが遅く、RSNAの初日(11月30日)の夜に、その冬初めての積雪があった。しかし、雪はその日だけで、それ以降は例年並みの寒いシ

カゴが、世界中からRSNAのために集まってきた放射線科医、医療現場スタッフ、研究者、プレス関係者、関連企業といった多くの人たちを迎えた。今回のRSNAは、前回まで2つの会場(ノースビルディングとサウスビルディング)で催されていた機器展示を、レイクサイドビルディングを含む3会場に拡張して臨んだが(図1～3)、2008年春の米国の金融危機をきっかけに始まった世界的な経済恐慌のあおりを受けたのか、出展企業関係者の数が前回よりも約12%も少なくなったため(2万8054人→2万4683人)、全体としては、前回(6万1980人)よりも約5%少ない、5万8795人の参加者となった。

世界を見据えた中での個人学習

2008年のRSNAのテーマは“Personal Learning in the Global Community”で、この言葉を「世界を見据えた中での個人学習」と意識すると、2008年の大会長であるDr. Theresa C. McCloudの今大会へのコンセプトが感じられる(図4)。Dr. McCloudは、胸部画像診断の分野において著名な放射線科医で、特に肺がん、間質性疾患、そして、塵肺の診断の著書がある。

学会初日(11月30日)に行われた、



図1 ノースビルディング会場

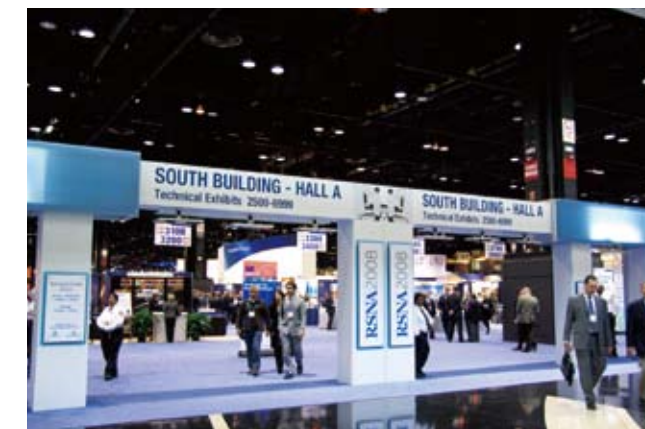


図2 サウスビルディング会場

Dr. McCloudの大会長講演“Trends in Radiology Training: North American and International Implications (放射線医学トレーニングにおける動向: 米国および国際的な意味において)”では、放射線医学がますますグローバル化し、われわれ以外の世界と互いに密接に関連し合う近い将来において、現在、重要視すべきことは、放射線医学における高いレベルの知識や技術を維持し、引き継いでいくための放射線科医トレーニングシステムを、将来を見据えて再構築することであると問題を提起した上で、そのトレーニングシステム実現のために、こういったことを考える必要があるかという内容で話を進めた(図5)。ここで、「われわれ以外の世界(the rest of the world)」という表現を彼女は用いているが、この「世界」という言葉は、国際的な世界という意味に加えて、医学の世界全体を意味していると考えられ、医療における放射線科医の役割の重要性

を強く認識していることに注目してほしい。つまり、今回のRSNAのテーマの「世界を見据えた中での個人学習」には、医学の世界の中で放射線科医がスペシャリストとして生き残るためには、どう対処していくべきか? という大会長の思いが込められているのであろう。

話を大会長講演に戻すが、放射線科医のトレーニングのシステムを変革するために、Dr. McCloudはまず4つの主要な要素を示した。それらは、①新規トレーニング実施対象者の選考基準、②カリキュラムの開発、③研究によるトレーニング、そして、④認証および資格制度で、これらの要素について、ヨーロッパ、南米、オーストラリア、香港といった海外諸国と米国のシステムの現状を比較することにより問題点を探った。ここで不思議だったのは、比較対象とされた国々の中に、日本、韓国、中国、インドといった近年の放射線医学を語る上で欠かせない国々の名前が含まれ

ていなかったことである。たぶん、資料をそろえることができなかったという簡単な理由だと思われるが、できれば、日本のシステムと比較したデータが知りたかったと思ったのは筆者だけであろうか。とにかく、海外諸国と米国を比較した場合、米国以外のほとんどの国では、認証と資格を得るための制度が緩やかであることを指摘し、画像読影のスペシャリストとしての技術を維持していくためには、世界的に標準化されたトレーニングシステムの構築が必要であると主張した。

残念ながら、今回の大会長講演の内容は、全体的に誰もがすでに認識しているもので、目新しさはなかった。しかし、Dr. McCloudが4つの要素の中で、特に重要であると指摘したのが“研究によるトレーニング”で、そのスライドの中で示されていた“Today's research is tomorrow's practice (今日の研究が明日の臨床となる)”と“He who owns the research may own the turf (研究を行うことのできる人は、そのことを自分の専門分野とすることができるだろう)”という2つの言葉は、適確に研究を行うことの重要性を的確に示していると思われる。共感できた。多くの放射線科医や医療関係者は、新しい技術や診断方法の習得に一生懸命で、ともすれば、そういった新しい知識の源がどこにあるかを忘れがちであるが、現在の医学のほとんどの知識は研究によって生まれたものであり、研究を軽視していると、これからの医学の発展は望めないと思われる。



図3 レイクサイドセンター会場